

2020年
1月9日
木曜日

豊原 法彦 経済学部長

「樂之者と希望」

関西学院大学経済学部をご卒業される皆さんに、心からお祝い申し上げます。

大学を卒業される皆さんは、所定の課程（2単位履修）を修了され経済学士とされます。

この機会に皆さんに2つのことをお伝えしようと思っています。

1つめは、物事に対して自分のスタンスに関するもので、論語からの引用です。

論語—雍也^{ようや}第六・二十
 白文：「子曰、知之者不如好之者、

好之者不如樂之者」

書き下し文：「これを知る者はこれを好む者に如かず、これを好む者はこれを楽しむ者に如かず」

おおよその意味としては、「あることを楽しんでいっている人にそれを好きだという人は及ばないし、好きだという人にそれを知っているという人は及ばない」ということになりま

しょう。集合を使ってかなり乱暴な要約をすれば、

「知之者」は「好之者」を含み、「好之者」は「樂之者」を含む

ということになるかもしれません。

皆さんは、大学生として教室や課外活動、学外での活動を通じてさまざまな知識を身につけたことと思います。それはあくまで「知る」の段階です。それを深めるためには、それを「好き」になり、ついには「楽しい」と思えるようになることが重要です。

そして大学でたくさん獲得した「知る」をもとに、これからの様々な経験を踏まえて、それらが「好き」や「楽しい」に深化することになるかもしれません。そのためには常に関心と意欲を持って学び続ける必要があります。

2つ目は、外的ショックを自分の中でどのように対処するかに関する

もので、新約聖書「ローマ人への手紙・第五章三節」からの引用です。

「艱難は忍耐を生み出し、忍耐は練達^{かんたつ}を生み出し、練達は希望を生み出す」

最近ではレジリエンス (resilience: もとは物理学の用語で、ばねやボールを壊れない程度にぎゅっと押ししたときに元に戻る力。復元力) と言われますが、想定外の困難に陥った時、一定の範囲内であればそれをま

ず正面から受け止め、それへ対応策を模索し、何度も飽くことなくチャレンジすることで改善の方向が見えてくるというのがこの言葉の1つの解釈です。

社会に出ると人知を超えたインシデントに直面するでしょうが、その時に自分の対応できる範囲内であれば全身全霊でもって対処しようという考え方です。そのためにも日ごろからの心身の準備、つまりシミュレーションをしつかりしておきま

しょう。備えあれば憂いなしです。

そしていざというときには最適な対応（＝リスクを評価した上でその時点で自分として最善と思われるもの。結果がどうであつたかは歴史が証明してくれます）ができるように、クールヘッド&ワームハード（イギリスの経済学者アルフレッド・マーシャルの言葉）を旨として行動しなければなりません。

皆さんが大学で学んだのは知識だけでなく、それに基づく能力とそれに裏打ちされた資質なので、自らを信じて歩み進めることによって、本学が *kwansai university* として標榜している「*Mastery for Service*」を体現する世界市民」という目標に近づくことができます。そしていつでも関学に戻ってきて下さい。わたしたちは心から歓迎します。